



境内の沙羅双樹

青葉の笛だより

第 15 号

平成 27 年 7 月号

発行所：大本山 須磨寺

〒654-0071

神戸市須磨区須磨寺町4-6-8

TEL 078-731-0416(代)

<http://www.sumadera.or.jp/>

高野山 開創一千二百年 記念法要を終えて

昨年、高野山真言宗ご当局よりの須磨寺派単独での記念法要執行のお話を、感謝の気持ちと大きな喜びで頂戴し、一山挙げてその日に向かいました。

あの大きな金堂で須磨寺にしか出来ない法要は、先代義人和尚が小池美代子氏と共に復活させた「一絃須磨琴」を活かすこと、そして、その琴の音と調和した、僧侶と檀信徒の声が一体となった法要が出来るようにと考えました。

この五十年に一度の勝縁に、ご一緒いただく檀信徒の皆さんもお琴の

演奏者も、お経や声明をただ聞くだけでなく、一緒に声を出して頂きたいの思いから出た結論が、須磨琴と共にご真言と般若心経をお唱えする法要でした。

四月十日の当日は生憎の雨空で、新しく建立された中門を通り抜ける行列は出来ませんでした。須磨琴の響く中を堂内に入り、先代も父も目にするこの出来なかった尊きご本尊様を前にした時、三十数年前にはこの金堂の仏器を磨いていた自分が、真言宗の一派を代表して登壇しようとしていることに大きな感慨を覚えました。そして、須磨琴に合わせて唱和される心のこもったご真言に、込み上げる感動を抑えきれませんでした。本当にありがたく、生涯忘れることのない法要となりました。

このような素晴らしいご縁を頂戴したことを大変幸せに思います。深き感謝の思いを胸に、大師信仰と密教の紹隆に精進してまいります。

南無大師遍照金剛

合掌

大本山須磨寺 貫主

小池 弘三

十三佛に見守られて(2)

摩耶山天上寺貫主 伊藤 浄厳

はじめに

十三仏のお話を書き続けられる予定であつた頼富本宏先生が、本年三月三十日にお亡くなりになりました。六十九歳という惜しまれるご遷化(せんげ)でした。ご承知の通り、先生は密教の権威で、学者としての要職を歴任され、曼荼羅(まんだら)を中心とした輝かしい業績を残され、密教の尊像学(図像学)を大成されました。学位論文を纏められた『密教仏の研究』『曼荼羅の鑑賞基礎知識』『庶民のほとけ』など、実に膨大な著書(ぼうだ)を出版され、学術論文も数百に及びます。

先生は、ご生前に次のように述懐(じゆつかい)されました。

「種智院大学の学長を辞めたので、これからは、今日まで強い関心を持ち続けてきた『通路』とか『巡礼』といった、庶民が実践修行してきた霊場めぐりの本当の意味を解明したいと思っています」、と。

先生のこのお言葉の裏には、今日までに発表された数多の著書や論文を集成(しゆじやう)して、著作集あるいは全集として出版し、頼富密教の成果を世に問われんとする気概(きがい)を感じ取れました。この大切なお仕事の時間がなくなつたことは、私たちも残念極まりないという思いで一杯です。

ご遺族の皆さま、檀信徒の皆さま、同学の士やお弟子方をはじめ、先生を敬愛されていた皆さまの悲嘆(ひたん)はいかばかりかと拝察(はいさつ)、お悔み申し上げる次第であります。

殊のほか、頼富先生とご親交があり、陰

に日向に先生をあたたく見守つてこられた大本山須磨寺の小池弘三管長さまのご落胆(ひつたん)も一入とお察(ひつたん)いたしております。

ところで、このほど小池管長さまから、頼富先生の十三仏のお話の続きを書いてみないかと誘(さそ)ひを受けました。私はとても頼富先生のように書けないと躊躇(ちゆうちよ)しましたが、副住職の小池陽人師の熱心なお奨めもあり、お引き受けすることにいたしました。もちろん、頼富先生ほどの学識(がくしき)はありませんが、私なりに十三仏についての感想を書き記してみたいと思います。



二、初七日忌を導いてくださる不動明王

—前号(第14号)に続いて—

一般的には、十三仏は亡くなった人のみ魂(たま) (み霊)を守り救つてくださる仏さまたちと思われています。しかし、十三仏は、過去精霊(しやうりやう) (死者の霊魂。あの世のみ魂)を済度(さいど) (苦しみから救い取り悟りの境地に導くこと)するだけではありません。十三仏の(尊)尊

は、現世(げんせ) (この世)にあつて、悩み苦しんでいる人たちをも救済(きうさい)してくださる有難い仏さまなのです。

例えば、不動明王を思つてください。皆さまは不動護摩を「存知」と思っています。不動さまの護摩祈禱(ごまきとう)の折、私たちは現世のさまざまなお願いごとが叶うよう、お不動さまにお祈りします。人それぞれに、家内安全・商売繁昌・息災延命・当病平癒など、お不動さまに祈願(きがん)をかけますね。

だが、十三仏と纏めて呼ぶときには、前号のごとく、中陰(ちゆういん) (初七日～七七七日)、百ヶ日、年忌(その人の節目の年の祥月命日に当たる一周忌～三十三回忌)の守り本尊となります。

それでは、以下この過去精霊の守護仏としての観点から十三仏について述べてみたいと思います。

ここで、中陰について少し説明しておきましょう。中陰とは、中有ともい、人が死んでから次の生(せい)をうけるまでの中間の存在をい、人の死後四十九日の期間のことです。この中陰の間は、亡者(亡くなった人)のたましいは、迷い苦しんでいても、自力(じりき) (自分の力)ではその迷いや苦しみを離脱(りだつ)して成仏(じふつ)することができないのであります。

それゆえに、遺族や故人ゆかりの人たちが、亡き人に代わつて、七日ごとに七回、十三仏の「尊ずつをおまつりし、心をこめて仏さまの済度(救済)をお祈りする」のであります。これを回向(くわう)といいます。回向とは「めぐらし向けること」で、自分の功德(とくどく)を亡き人のみ魂に施し、成仏(極楽往生)の資となるよう願うことであります。この回向の功德によつて、亡き人のみ魂は苦しみや迷いを脱して、悟りの道(仏となる道)を歩むことができるのであります。これは又、すで

に仏となつていらっしゃる先祖さまのお仲間入りをすることを意味しています。かくて、仏となつた亡き人のみ魂は、遺族やその子々孫々を見守り、間違つた道に迷い込まないように導いてくださるのであります。

その中陰の最初の七日間の導師(でうし) (迷っている人を正しい道に導く仏)が不動明王なのです。この明王さまは、すべての仏さまの智慧と慈悲の総徳(そうとく)を持つておられる大日如来のお使いといわれています。(不動使者)

ところで、不動明王の誓願(せいがん) (心に願うこと)は、いったいどんな願いなのでしょう。その誓願は、人々の煩惱(ぼんのう)や邪(よこしま)な欲望を断ち切り、人間として正しく生きたい、人々のために誠(まこと)を尽したい、悟りへの道を歩みたい、と願う人々たちを断固(だんこ)として守り導かずにはおかないという、この上なく力強い仏さまなのであります。

この明王の実に頼もしい慈悲の誓願は、十三仏の中でも特に顕著(けんちやく)で、かつ象徴(しやうてい) (具象的に造形されています。すなわち、忿怒(いかり)の形相(がたがた) (顔つき)をもつて睨みつけ、牙(きば)のごとき二つの歯で唇(くちびる)を噛みしめ、右手に両刃(りやうへん)の剣、左手に羅索(わなと縄) (わなと縄)を持ち、真つ赤な火焰(かえん)を背負い、盤石(ばんせき) (巨大で重たい岩)に坐すか、あるいは起立しておられます。言うなれば、不動明王の誓願は、迷える者を守り導くという強い意志がダイナミックな動(うご)のエネルギ―となつて発動しているのです。

このように、お不動さまは、仏教に無知・無関心な人々や亡き人のみ魂の煩惱を取り除き、懺悔(ざんげ)させて清浄(けいじやう)ならしめ、仏道と導き、確(か)と寄り添(よ)つて、二七日の守り本尊であるお釈迦さま(釈迦如来)のもとに連れて行つてくださるのです。まことに尊く有難い仏さまなのであります。

桜寿院・秋の行事のご案内

毎年、少しずつ信者さんと共に拝み・学び・体験してまいりました桜寿院の会。特に会員制などはありません。お大師様を信仰している方々とともに、楽しく一時を過ごせればと思います。今年は「結びつき」をテーマに各講習会を開いてまいります。日ごろの心と体の疲れを癒して頂けたら幸いです。

場所 須磨寺 桜寿院

日時 十月三日(土)午後三時三十分 講話「お寺入門」定員十二名

十月三日(土)午後六時三十分 密教瞑想法 定員十二名

十月九日(金)午後三時三十分 ヨガ体験教室 定員二十名

十月九日(金)午後六時三十分 ヨガ体験教室 定員二十名

十月三十一日(土)午後三時三十分 ヨガ体験教室 定員二十名

十月三十一日(土)午後六時三十分 ヨガ体験教室 定員二十名

会費 一回お一人 五百円

申込 須磨寺 桜寿院 電話 〇七七八ー七三二ー〇九一八

定員になり次第、締め切らせて頂きます。

諸注意 駐車場はご用意しておりません。公共交通機関でお越し下さい。



●講話「お寺入門」(お寺との結びつき)

講師がお寺に入門した時に体験した事を中心にお話しいたします。真言宗の教えに触れて頂ければと思います。

服装 自由・椅子に座ってお話を聞く会です。

講師 井上 真英

●密教瞑想法 (心と体を結ぶ)

真言宗の座禅(瑜伽・ヨガ)のひとつです。日ごろの悩み、ストレス解消、集中力を養う為に、瞑想法を体験してみ下さい。講習では心のコントロールの仕方を学んで頂き、実習では少し座禅を体験いたします。

服装 簡単な体操と足を割って座りますので、動きやすい服装でご参加下さい。

講師 井上 真英

定員 十二名

●ヨガ体験教室 (心と体を結ぶ)

特別講師・鷺尾知子先生をお招きしまして、ヨガ教室を行います。若い方から年配の方までどなたでも参加頂けるやさしいストレッチとヨガです。

持ち物

動きやすく締め付けない服、大判のタオル又はヨガマット、飲み物、温度調節のための羽織るものがあると便利です。

ご案内 レッスンの約二時間前までにお食事は済ませておいて下さい。



特別講師 鷺尾 知子先生

ヨガは心と身体を繋ぐツールのようなもの。身体はもとより、心の平穏や安らぎ、深い呼吸によるリラックスの効果などその恩恵は計り知れません。そして、そこにはいつも「ニコ笑顔で過ごせる暮らしのヒントが詰まっています。どうか難しいことは抜きにして、のびのびとお身体をほぐしながら、ご自身と静かに向き合う午後のひとときをお過ごし下さいませんか? どうぞよろしくお願いたします。

●シヴァナンダヨガティーチャートレーニング卒業
●シニアヨガ養成講座修了

夏・秋の行事案内

◇七月.....

○三十日(木) 第六回 子ども寺子屋修行

◇八月.....

○九日(日) 四萬六千日燈明会 みあかり観音

〈午後六時〉 須磨寺 本堂

○十二日(水) 十五日(土) 孟蘭盆会

○十五日(土) 盆大施餓鬼法要 〈午後二時〉 本坊客殿

○十七日(月) 青葉殿孟蘭盆会法要

〈午前九時・正午・午後三時〉 青葉殿

○十九日(水) 盆大施餓鬼法要 〈午後二時〉 桜寿院本堂

○二十日(木) 盆大施餓鬼法要 〈午後二時〉 蓮生院本堂

○二十日(木) 二十一日(金) 盆大師(ご縁日)

◇九月.....

○二十日(日) 二十六日(土) 彼岸会 特別護摩祈禱

〈午前十時・午後二時〉 護摩堂

◇十月.....

○二十四日(土) 須磨寺保存会発足五十周年記念演奏会

〈午後四時〉 神戸文化ホール

◇十一月.....

○二十三日(月) 秋の大祭 須磨の火祭り

柴燈大護摩供

〈午前十一時〉 須磨寺境内

◇十二月.....

○三十一日(木) 除夜の鐘 午後九時半より整理券配布

(百八名まで絵馬授与) 鐘楼堂



柴燈護摩



子ども寺子屋修行



高野山開創千二百年記念 須磨寺派慶讃法要



去る平成二十七年四月十日、午後二時より須磨寺派一山あげて、高野山金堂にて高野山開創千二百年慶讃法要を厳修いたしました。

今回は団体参拝を企画しまして、前日九日から檀信徒九十八名バス三台で須磨寺を出発し高野山へと向かいました。途中いづれもお大師様ゆかりの地であります、河内長野の観心寺、九度山の慈尊院に参拝いたしました。観心寺では、副住職様の有難いご法話を頂戴し、慈尊院では二十一年に一度のご開帳されるご本尊様の国宝・弥勒菩薩像を拝ませていただきました。何れも素晴らしいご縁に恵まれ、檀信徒の方々とこの法悦を分かち合いました。

高野山では、須磨寺と古くからご縁があります。遍照光院の宿坊でお世話になりました。到着するなり、ご住職のご法話とお茶のお接待を頂き、その後は、それぞれにゆつくりと旅の疲れを癒しました。

十日法要当日は、奥の院参拝後、雨の為、急遽予定していた立里荒神から霊宝館に変更し国宝や重要文化財など貴重な宝物を拝観しました。

そして二時からの法要には、団体参拝に参加できなかった檀信徒の皆様も駆けつけて下さり、金堂には四百名以上の方々が参拝されました。法要に先立ち、須磨寺の奉納演奏が行われました。須磨寺貫主小池弘三作詞の「高野山開創報恩讃歌」と、「今様仏恋」、お祝いの曲「八千代鳥」の三曲を四十三名の須磨琴奏者が奏でました。その後、須磨寺が鳴り響く中を小池貫主はじめ、金棒引きを先頭に総勢三十名が入堂しました。小池貫主が慶讃文を奉読し、その後僧侶や参拝者の真言読誦の声に須磨寺の響きが重なり、お堂は一体感に包まれました。最後に須磨寺の演奏に合わせ般若心経をお唱えし、法要は厳かに終了しました。お大師様のご遺徳を忍び、多くの方々と共に開創千二百年をお祝いできましたこと、深く感謝申し上げます。

須磨の火祭り 火渡り修行

須磨の火祭りは屋外での柴燈大護摩供で、この一年を無事に終えた事を仏様に感謝し、火渡りによって身を清め新しい年を迎えるために晩秋に行います。火渡り神事とは火生三昧ともいわれ、柴燈護摩の終わりに火の上を渡る荒行です。浄火により災厄を祓い福を招くといわれております。特に来年厄年を迎える方は、厄難消除のために、火渡りをして身を清め、新年をお迎えください。

入壇（火渡り）の方は当日お札、行者手ぬぐいをお渡しします。

記

一、日 時 十一月二十三日（月・祝）午前十一時開白

一、会 場 須磨寺境内 ※荒天時は、護摩堂にて

一、ご 祈 禱 特別祈禱札 一万円・三万円・五万円

添護摩木 千円

一、火 渡 り 厄年特別火渡り 五千円

一般火渡り 二千円（先着百五十名）

※火渡り神事は荒行でございます。多少のやけどもござい
申込書の注意をよくお読みのうえお申し込みください

一、お申し込み 須磨寺派各寺院にお申し込みください。

平成二十八年 厄年表

平成 十 年生（女性）	厄年	平成 四 年生（男性）	小厄
昭和六十 年生（女性）	前厄	昭和五十一年生（男性）	前厄
昭和五十九年生（女性）	本厄	昭和五十 年生（男性）	本厄
昭和五十八年生（女性）	後厄	昭和四十九年生（男性）	後厄
昭和五十五年生（女性）	厄年	昭和三十一年生（男性）	厄年
昭和三十一年生（女性）	厄年		



須磨寺御詠歌講へのお誘い



須磨寺の御詠歌講は、およそ六十有余年の歴史を重ねて今日に至っております。先々代真禪大僧正のお声かけで始まった須磨寺御詠歌講は、お芝居・踊り・御詠歌と三演目を同時に教えて下さった近藤きみゑ先生の元で、沢山のお弟子さんと共にいつも笑いの絶えない明るく楽しい御詠歌講でありました。近藤先生が百余年のお命を全うされ御遠行の旅につかれた後は、色々とお手本になって下さった先輩方も引退されて、年月を感じざるを得ません。

この度、須磨寺副住職のご意向によりまして、新たに須磨寺御詠歌講に入講して下さる方を広く募集することとなりました。須磨寺御詠歌講では、毎年弘法大師様のお誕生日をお祝いする「いろは祭り」で神戸国際会館の大ホールの舞台にたちます。また須磨寺での諸行事に参加し、御詠歌をお唱えします。様々な行事に参加するなかで、仏様とのご縁、多くの方々とのご縁が深まります。

また、須磨寺には須磨寺にだけ伝わる貴重な御詠歌がいくつもあり、みなさんと一緒に勉強してゆきたいと思っております。お寺のお座敷で美しいお庭を眺めながらのお稽古は、すぐくありがたい時間です。是非多くの方にお越しいただきたく存じます。

一度お教室へ足をお運び下さいませ。心よりお待ちしております。

須磨寺御詠歌講

代表 亀谷詠弘

※お教室は毎週火曜日 午後二時から
三時です。須磨寺寺務所へお越し
下さい。ご案内いたします。



須磨寺の歴史(十五)

― 須磨寺参詣曼茶羅(四) ―

これまで三回にわたって「須磨寺参詣曼茶羅」とはどのような物で何が描かれているのかということを見てきましたが、今回はこの参詣曼茶羅から読み取れる当時の社会状況をみていきたいと思っています。

まず、この参詣曼茶羅がいつ描かれたのかというと、十六世紀から十七世紀の間といわれています。この時代の『当山歴代』の記事を見てみると天正五年(一五七七)の記事に、織田信長が伊丹城を攻めたときに西宮から一ノ谷まで放火し、須磨寺の仁王門が焼失したという記事があります。

実はそれ以前の約半世紀の『当山歴代』の記事を見ると、わずかに天文二十二年(一五五三)の記事があるのみですが、天正五年以降の記事は内容・体裁も整い、詳細で内容豊富になります。

これまでの『当山歴代』は何らかの理由で須磨寺が荒廃して、復興事業を行うときに書かれたことが多いため、この時も何らかの形で復興事業が行われたと思われます。そして参詣曼茶羅は勸進僧が勸進、もしくは参詣を促すために描かれたと言われていますから、まさに復興事業の一環として参詣曼茶羅は描かれたと思われます。



「参詣曼茶羅」を見ると数多くの参詣人が描かれています。特に注目すべきなのが、鐘楼左手に西国巡礼者が描かれていることです。須磨寺自体は西国札所ではありませんが、名所めぐりのために須磨寺を通過する海辺ルートも利用されていたことを示しています。また『当山歴代』の文禄五年(一五九六)の記事に大地震があり、多数の西国巡礼者が死傷した、との記事もそれを裏付けています。

江戸時代になると平和な世の中を反映して、一般の人々も数多く巡礼の旅に出るようになります。各地の有名神社は巡礼者で溢れることになりましたが、一般の人々に参詣を促すために描かれた参詣曼茶羅はまさにそれまでの戦乱の時代から平和な時代の到来を表す象徴的な物であると言えるのです。

今年の境内整備事業

記

一、一ノ谷弁財天(経木供養所横) 及び周辺整備工事

工期

平成二十七年五月中旬着工

施工

株式会社 金剛組

※弁財天様のご神体は寺務所(納経所)屋上に仮安置しております。

一、本坊庫裡新築工事

工期

平成二十七年五月上旬着工

施工

株式会社 河内工務店

一、石仏苑新築工事(参道横)

工期

平成二十七年五月中旬着工

施工

株式会社 鹿島道路

※株式会社サンクロレラの前会長が収集されたアジアの石仏群を現社長が当山に奉納されました。そのご縁から参道の景観向上と参詣者の安らぎの場となるよう、石仏苑を造立することとなりました。

平成二十七年 年忌一覽

一	周忌	平成二十六年
三	回忌	平成二十五年
七	回忌	平成二十一年
十	三回忌	平成十五年
二	十五回忌	平成三年
二	十五回忌	平成元年
三	十三回忌	昭和五十八年
三	十七回忌	昭和五十四年
五	十回忌	昭和四十一年
百	回忌	大正五年

献金と寄進者のご報告

◆奉納に対する御礼◆

平成27年1月1日～6月30日

わらべ地蔵尊 奉納

古高	浩子様	久保	勲様
竹場	芳子様	片山	悦子様
土田	美行様		

◆皆様の献金に対する感謝とご報告◆

平成27年4月30日までの累計

東日本大震災	¥2,574,200
おぎゃー献金	¥329,858
盲導犬献金	¥1,327,263

ご奉納並びにご献金に感謝申し上げます。



お名前はここに記入されます。

護摩堂改修 落慶三周年

護摩堂改修落慶三周年を記念して、護摩堂に新たに扁額と釣灯籠を備え付けることになりました。釣灯籠を奉納するにあたって、みなさまに、ご寄進をお願いしております。ご寄進いただいた方の芳名は、釣灯籠に記され、末永く顕彰されます。一件、七万五千円です。お申し込みは、本堂前寺務所までおいください。

四萬六千日燈明会

ゝみあかり観音ゝ

四萬六千日とは、観音様のご縁日で、この日にお参りすると、四萬六千日参詣したのに相当する功德を生ずると言われています。

須磨寺では本堂において初盆精霊供養の法要を執り行い、引き続き境内にろうそくで形づくられた巨大な観音様のお顔、みあかり観音の前で読経し、皆様方の所願成就・萬霊供養をご祈念申し上げます。その後、本堂前において和太鼓の奉納演奏などの催しもございます。ご知友お誘い合わせてご参拝下さい。



一、日 時 八月九日 午後六時より
一、会 場 須磨寺本堂前
一、供養・ご祈禱料

ろうそく	一本	千円
祈禱札	一本	三千円
経木供養	一霊	三千円

◎須磨寺本堂前寺務所にてお申し込み下さい。

須磨琴保存会 五十周年をむかえて

SUMAKOTO HOZONKAI 50th

一枚の板に一本の弦をはっただけの簡素な琴「須磨琴」。平安時代に須磨に流された在原平卿がその無聊を慰める為に考案したと伝えられています。「一絃琴」と呼ばれることもあります。太平洋戦争が終わった頃には、演奏者は殆どなく楽器の存在すら殆どの人は知りませんでした。発祥の地であり現存最古の一絃琴を保存している須磨寺では是非この琴を復興伝承していきたいと、昭和四十年に須磨寺前貫主小池義人和尚が須磨琴保存会を発足させ五十年が経ちました。



本年十月二十四日(土) 四時から神戸文化ホールで、五十周年の記念演奏会をいたします。今回の演奏会は、震災二十年の年にも当たりますので、鎮魂と復興を祈り、僧侶の読経に合わせ、般若心経を最初に演奏します。そのあと古典曲を五曲、合奏曲を二曲、この日の為に作った新曲を三曲予定しています。

新曲は、下村正彦先生「須磨の詩」の春、菊重精峰先生「紫野」大海人皇子と額田王の歌で万葉の口マンを奏でます。そしてもう一曲は「ひとすじに」。須磨琴大成の名人、真鍋豊平翁の歌で、須磨琴がいつまでも続くようお願いをこめて作られました。

今年四月、高野山開創千二百年の法要に参加し、高野山金堂で、須磨琴を献奏させていただきましたが、無事に終えて、今は五十周年の記念演奏会に向けて、一同猛練習しているところです。

振り返ってみますと、五十年前須磨琴保存会は何もないところから出発しました。一絃琴研究家 加藤盛男氏の紹介で和田国子先生にご指導をお願いし、琴は須磨寺の宝物である覚峰阿闍梨の琴を見本に指物師に依頼、芦管は竹簞の柄を切って作りました。義人和尚の呼びかけに応じた十人で昭和四十年一月十日から稽古が始まりました。当初は音が小さく音色は悪くとも楽器とは言えない状態でしたが、保存しなければならぬという使命感で稽古を続けておりました。

その後、昭和四十三年頃から珍しい楽器が復活したという事で、マスコミに再々取り上げられ演奏依頼が増えていきました。年二百回以上演奏した年もありました。そのうち私たちは「珍しいから」に甘えてはいけぬ、音楽として鑑賞に堪え、人の心に響くようなものになければと思うようになりました。練習を

重ね楽器の改良、低音琴の開発、その他諸々のことに取組みました。多くの方々のお力添えもあり、おかげで次第に認められるようになりました。

何よりも嬉しいことは、当初の仲間十人が仲良く心をついに続けてこられたことです。亡くなられたり老齢のため近年、次々と引退されたりしましたがそれでも四人が今も頑張っています。

若い人たちが育って保存会をしっかり守ってくれていますし、幼稚園、小、中、高校の子どものための倶楽部での取り組みもあり、未来はとも明るく感じています。義人和尚亡きあとは、弘三管長の応援があり、後援会が出来て新野幸次郎先生始め多くの先生方が見守って下さっており、心から有難く感謝しております。現在、会員数は三百人、教室は三十力所になりました。緑に包まれた風光明媚な須磨寺で、多くの方のおかげをいただきながら、須磨琴保存会の皆様と共に須磨琴を伝承していく日々、幸せを感謝しながら稽古に励んでいます。

繰返しになりますが、須磨琴保存会五十周年記念演奏会を下記の通り開催いたします。多くの皆様のご来場をお待ちしております。

記

日時 平成二十七年十月二十四日(土)
四時開演
会場 神戸文化ホール 中ホール
入場料 三千円(須磨寺で購入できます)

須磨琴保存会代表

小池 美代子